生存科学研究所ニュース

Vol.5. No.2. 1990.3.10発行

目　次

●巻頭言　「物質文明」から「生命文明」へ
……渡辺　格…1
●第49回生存科学研究会　「人間はなぜ人間か」
……江原昭善…1
●生存科学ビューポイント……2
●エッセイズ・キュート「生活水準と経済の効率」
……3
●ハーバード大学武見講座活動報告……4
●維持会員だより（会員移動）……5
●ニュース・オブ・ニュース……6
●公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース…7
●学術誌「生存科学」投稿規定……8
●お知らせ……9
●生存科学研究所ニュース（VOL.1-1～5-2）
総目次……10
●編集後記……14

発行：財団法人 生存科学研究所
〒104 東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303
電 話 03-563-3518

●巻頭言

「物質文明」から「生命文明」へ

生存科学研究所　顧問
慶応義塾大学名誉教授　渡辺　格

現在、わわれわは「生命文明」とでもいうべき一段進んだ文明に向かわなければならない時期に来ていると思われる。

私は若い時から、自然科学こそが文明を導く先達ではないかと考えてきた。デカルト以来、近世自然科学は、自然現象の根底にあると予想された物質（とエネルギー）の世界を明らかにしてきた。それを思想的、技術的に肉付けすることで「物質文明」が展開してきたのだといえる。

最近、自然科学の目指す方向が、物質→生命→精神（心）の方向に転換してきた。これは、現在考えられる宇宙の進化（展開）の方向 — まずビッグ・バンに始まるエネルギー・物質の世界の形成、次いでその展開の中での“生命をもった物質系”としての生命の誕生、さらにこの生命（生物）界の進化の過程での心（知性）をもった人間の出現と、それによる文化の形成という順序 — と一致する。ここに自然科学がやっと多重（多層）的構造を現わしてきたといえる。

進化（展開）する宇宙は、多様化に向かっているが、その一つの分枝の先頭にある人間の立場から見ると、物質とエネルギーの世界の上に生命（生物）世界がつくられており、さらにその上に人間世界があり、これらの世界が相互に作用し合いながら、未来に向かっていると言うことになる。

このような、一にして多重な構造をもって進化（展開）している“自然”という認識は、1960年代以降はっきりしてきたが、その一つの契機として、1920年代終りから1930年代始めにかけてのボーアらコペンハーゲン学派の反デカルト運動があったことを指摘したい。

ともかく、最近の自然科学の歴史的方向転換は、文明そのものの変換をもひきおこさないではいられない。私はそれはまず「生命文明」へ上ることであり、その上でさらに自然科学的に物質→生命→精神の方向で裏付けされた“新しい精神文明”に向かうことではないかと考えている。生命文明とは、「物質エネルギーの世界の上に、豊かな生命（生物）の世界をつくり、次に来るべき“心を豊にする世界”に行ける基盤をつくること」であろう。

環境問題などにしても、物質・エネルギー世界と人間世界の間に、はっきり生命（生物）世界を入れ込んで考えることの必要性を強く訴えたい。豊で安定な生命（生物）世界なしには、人類の生存はおぼつかない。「生命文明」に向かうべきことを述べた真意はそこにある。

●第49回生存科学研究会

人間はなぜ人間か
ー人類誕生の地平よりー

京都大学霊長類研究所教授　江原昭善

平成２年１月20日（土）午後２時より、大手町経団連会館において第49回生存科学研究会が開催され、「生存環境と生存科学」シリーズの第５回として表記の講演が行われた。

詳細は、近々生存科学研究所から発行される研究雑誌『生存科学』の創刊号で紹介されるので、ここでは簡単な紹介にとどめる。

江原教授は「ゴリラ、チンパンジーは人間の一部であることが解ってきた。彼等は類人猿ではなく亜人類というべきだ。」と最近の研究成果を先ず紹介され、聴取者を引きつけられた。次いで、人類の進歩の加速度をとりあげ、産業革命以後の進歩がいかに早いかを説明し、また人類が人類になったときを見れば現代が見える。人類は直立二足歩行、洞察力と自省力、家族構成、道具の製作と使用、言葉を使うという特徴を始めから持っていたが、これらがもたらす矛盾が、道具による大量殺

人、人口環境の発達による自らの家畜化等々、そのまま我々が現在直面している問題に繋る。現在は危機的状態であるが、生物の進化はいつも危機的状態で起きている。オプティミスチックに見れば、今、産業社会から新産業社会への飛躍の臨界状態であるとも言える、と結ばれた。

●生存科学ビューポイント

我が国の肝炎対策に武見太郎先生の果された役割と遺訓

日本赤十字社　中央血液センター副所長　西岡久壽彌

— 21世紀は慢性肝炎が国民病になる —

わが国の肝炎対策は、ライシャワー大使刺傷事件(1964)をきっかけとして、B型肝炎・C型肝炎をとわず、科学的研究の進歩に常時対応しながら、現在では世界のトップレベルを進んでいる。その原動力となってよく使われているキャッチフレーズは武見先生の語録のうちでも有名なこの見出しの言葉である。先生の同名の著書がサイマル出版会より刊行されたのは実に1979年のことである。

出版された直後、日医会長室によばれて、神田のソバズシを御馳走になりながら御著書をいただいたのがついこの間のように思い出される。

御著書のうちで肝炎のことにふれられているのは一ページたらずの一小節だけで他は、国民の健康に対するビジョンと、21世紀の医療体制の展望の上に立った医療改革の全容を熱烈に訴えられている。それにもかかわらず本の題名を「21世紀は慢性肝炎が国民病になる」とされた卓見の基礎には、わが国の肝炎対策に先生の果たされた大きな役割がある。

1968－72年にかけて我国の研究陣が果たしたB型肝炎に対するめざましい成果をふまえ、73～76年東京都で地域医療に立脚して推進されていたB型肝炎対策から、武見会長は第2次完全診療月間としてB型肝炎対策推進の日医会長宣言を78年2月に出され、ひき続きHBs抗原検出法講習会、技術研究を、日医講堂や東京都臨床研で主催され、日医が中心となって地域医療機関内肝炎対策に関する研究を発足、推進されたのである。その成果は、大分市、水戸市、八戸市、千葉県安房郡の各医師会から日医会誌87：665－694 (1982) に

記載されている。

1979年、筆者が厚生省科学研究B型肝炎班長をしていた時に、最終的に医師会と厚生省と研究班と一緒になってB型肝炎対策ガイドラインを作らなければならない状態にまで進捗した。時恰かも、武見会長が、厚生省の役人は一切日医会館に立ち入り禁止という時期であった。研究費も使い果たし、適当な会場がなかったところ、武見先生が医師会の講堂でやろうといわれ、その時は、公衆衛生局長はじめ立ち入り禁止の人たちもみんな日医会館に入って来て、熱心な討議を重ね作りあげたのが、日本の医療機関内B型肝炎対策ガイドラインであり、近くはその改訂版が日医会誌の付録として全国に配布（1988）され、また我国のエイズ感染対策ガイドラインや、基礎資料としても重要なものともなった。

その後、感染マーカーの検出法、B型肝炎免疫グロブリン、ワクチンの開発、抗ウイルス剤の開発と基礎医学、臨床医学、公衆衛生を通じて医療陣、衛生行政の努力が結集しB型肝炎に関する限り、21世紀前半には我国からほとんど制圧可能と対策が進展、先生の予言を破れる見通しが得られたと欣喜した所に、非A非B型肝炎という最大の難関が現れ、輸血後肝炎の多発、原発性肝癌の倍増という深刻な事態に直面している。しかし、C型肝炎ウイルス遺伝子の検索に端を発し、B型肝炎対策で培われた我国の研究陣、医療陣はこの問題の解決に大きな希望が得られる成果をあげつつある。先生の予見はここまであったかと思うと同時に、C型肝炎についても先生の予言を破るべく努力が続けられている。

医療の第一線で直面している課題を、研究室、病院から地域医療へ、そして国全体の対策に、科学的な基礎と、医療技術の進歩普及、社会の連帯が一体となって進展させ、世界の現状をふまえて国際協力と技術移転に進ませる。医学本来の道すじを進んでいるKey Pointに武見先生のひきいた日医の先見性と指導性は我国医学史に輝く一ページとなっている。

●エッセイズ・キュート

生活水準と経済の効率

一つの国の生活水準は、その国民の一人当りのエネルギー消費量によって分かると言われる。しかし、最近のソビエト経済をみていると、この定説があやしくなる。

1988年のソビエトの一人当りの一次エネルギー消費量は石油換算で5723ℓで、日本の3568ℓを60%も上回っている。アメリカの9139ℓには及ばないが、西ドイツやイギリスよりも上だ。ソビエト国民の生活水準が、西欧や日本なみであってもおかしくない。

ところが、ソビエトは今、極端な物不足に見舞われている。石鹸、洗剤、歯磨き粉などの消費物資を日本など西側から緊急輸入したが焼石に水であるという。

最近の報道によると、「北シベリヤでは、ジェット燃料の不足のため、石油開発の要員、機材を運ぶ飛行機が、2週間も飛べなかった。このため一部の油田は凍結してしまった」という。

ソビエトは、世界最大の産油国であり、毎年一日400万バレルの石油を輸出している。そのような資源大国で、何故、このような事

が起こるのだろう。

ソビエトの経済運営がうまく行かない最大の原因は－共産圏共通の特徴だが－経済機構が縦割りで、すべてを共産党中央の少数者が支配しているからである。一般の労働者は、上からの指示通りに動いているだけで、自発的に動こうとはしない。

もう一つの原因は、「ハイテク」の立ち遅れである。技術者の数は、アメリカよりも、日本よりも遙かに多いが、効率的に動いていない。

2月8日、ソビエト共産党は、70年続いた共産党の独裁を放棄したが、果して経済は立ち直るのか。ペレストロイカが始まって5年も経っていることを考えると、俄に楽観的にはなれない。

経済の効率の重要さを知らされる最近だ。

(O)

ハーバード大学武見講座活動報告

＜武見リサーチセミナー＞

12月4日 "Transnational Politics and Reproductive Health Care: The Case of Abortion"／Barbara Crane
「母性保健と国際協力――妊娠中絶に対する各国の対応から」

12月6日 "A Health Financing Planning Model : Application to Rwanda"／Donald S.Shepard and Eokart Kleinau
「途上国保健医療財政のシミュレーション・モデル」

12月11日 "Public Health Policy and Mass Media"／Rika Mazaki
「公衆衛生とマス・メディア」

12月18日 "Community Oriented Primary Care: Origins, Evolution, Applications"／Stephen Tollman
「COPCの歴史と実践」

'90年

1月8日 "Recent Research on Acute Respiratory Infections"／Mark C.Steinhoff
「急性呼吸器感染症研究の現状」

1月22日 "Community Diagnosis: Personal Experiences"／John Wyon
「地域診断――米・英・インド・アフリカ諸国での経験から」

1月29日 Field visit to"Codman Square Health Center"／Anthony Schlaff
「コミュニティ・ヘルス・センター訪問」

2月5日 "Developing Community Nutrition Programs for Undernourished Chiidren"／karen Peterson
「低栄養児に対するコミュニティ・プログラム」

維持会員だより

会員　株式会社敬文堂代表取締役　竹内禮二

私は50年間風邪をひく程度で、病気らしい病気をしたことがありませんでした。

従って、お医者さんとの関わりと言えば、学生時代の校医による定期健康診断ぐらいと記憶しています。そんなわけで自分自身の健康を過信するようになっていました。

40才を過ぎた頃から急激に体重が増えはじめ、人間ドック入りを強くすすめる周囲の人達の言葉にも決して耳を貸そうとしませんでした。それが丁度50才の時（６年前）思いもかけない突然の胸苦しさに襲われました。

これは平常な状態ではないと察し、自ら病院に行く気になり、そして色々な検査の後、カテーテルを行いました。その結果は、虚血性心疾患と診断され、冠血行再建手術を、することになりました。手術の日まで約１ケ月ほどありましたが、毎日が不安と恐怖で仕事も手につかず、心臓病に関する本を手当り次第読みあさりました。手術は成功し、お陰様で私は命を取り留めることが出来ました。

入院生活は約１ケ月程度でしたが、その間、医療に従事しておられる方々の患者さんに対する誠意ある世話振りには感謝はもとより、ただただ敬服させられました。病気をする前は、医療に関して無知で殆ど関心がありませんでしたが、今日、元気で生きていられることを思います時、しみじみ生命の尊さと、健康であることの有難さを感じております。お世話になりました先生方と現代医学の技術と進歩に対して心から感謝の気持ちでいっぱいになりました。２年前になると思いますが、早大の田村教授との雑談の中で、私は入院生活の体験を通して、日本の医療を中心とした科学と社会との関わりあいについて話しあったことがありました。門外漢の私が医療の事にいささか関心を持っていることに目をかけて頂き、生存科学研究所の会員に推薦してくださいました。

私は会の中心は医師会の諸先生方と聞いておりましたので、その研究会も臨床医学による最新の医療機器の紹介やら、手身近な手術やその方法等の発表の場と軽く考えて出席させて頂きました。しかし実際は私の予想をはるかに超えた次元の高い研究会で、そこには武見先生の思想・精神・業績を引き継ぎ、発展させようとする会員各位の熱意と情熱が感じられ、その雰囲気はまさに緊張感溢れるものでした。活動の一つの例として、一会員の方は、地域環境問題を取り上げグローバルな観点から世界各地を周り調査研究し、その成果を発表されております。まさに90年代に日本が果たさねばならない重要な役割と課題であると思われます。このような研究を継続するためには、とりもなおさず恒久の平和を維持することが大切であると思われてなりません。

「生存之理法」つまり生存科学研究所の精神が今後世界各国に接する日本の基本的な姿勢であって欲しいと思うのは私一人でないと思います。そこには常に豊かな物質と豊かな精神のバランスのとれた社会の到来が期待できるような気がするからです。

私は生存科学研究会の例会に出席し諸先生方の素晴らしいお話を拝聴出来ることを望外の喜びとしております。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

永久維持会員誕生

谷信正先生（奈良県）は、武見太郎先生の御恩に報いるため、生存科学研究会、公益信託武見記念生存科学研究基金、財団法人生存科学研究所の研究活動が永続するための資金にと、永久維持会員となって維持会費を永久に納め続けたいとお申しこみになり、多額の御寄付をお送り下さいました。（既報）

研究所は谷先生の御好意に感謝し、「谷信正財団維持会費永久納入基金」を設け、谷先生を永久維持会員とし、その収益を永久に維持会費（生存科学研究会費）に振り替えることによって、谷先生の御意志を達成できるようにしました。このようなことは、研究活動の財政基盤を長期的に安定化するものであり、これから同じような御厚志の方々が増えられることが期待されます。

＊　＊　＊　＊

維持会員異動・寄付の紹介

（平成１年12月１日～平成２年１月31日）

入会

・個人

小松泰司

浅井ゲルマニウム研究所代表取締役

退会

・法人

医療情報電送センター

浅井ゲルマニウム研究所

ニュース・オブ・ニュース

研究所日報

１月20日	第３回常務理事会
１月23日	市原市アンケート調査検討委員会
１月27日	市原市シンポジウム報告書作成委員会
２月10日	基金・財団合同研究企画委員会
２月10日	総合健康問題総合委員会

＊　＊　＊　＊

市原市アンケート調査検討委員会

１月23日（火）開催された委員会では、鈴木雪夫委員長のもとで、市原市における疾病構造の将来予測を立てるために健康保険のレセプトから病名調査を行い、その経年変化等から医療需要の変化、疾病構造予測を行う調査の準備が進められた。

＊　＊　＊　＊

市原市シンポジウム報告書作成委員会

市原市「市民のための健康づくり計画」シンポジウム報告書の作成は、シンポジウムの記録に添える報告書として山口正民委員長のもと、３月の提出期限を前に急ピッチで作業が進められている。１月27日（土）の委員会では、分担した原稿が出揃い、その調整に入った。

＊　＊　＊　＊

基金・財団合同研究企画委員会

２月10日（土）午前10時から開催された研

究企画委員会は、来年度の事業計画作成の準備もかね、各種研究事業について検討が行われた。

既に進められている千葉県・市原市での研究や懸案になっている福岡県・宗像市、北九州での研究等、今年度事業の継続のほか、新たな事業として、北上川流域における生活・文化・健康に関する調査研究、各種受託研究、東京で開催予定のライフサイエンスを基盤とした生存科学の大型シンポジウム、雑誌『生存科学』を始めとした出版・公報活動、今年ボストンで開催される第４回武見国際シンポジウム、その他各種事業等基金・財団両者の共同による広範な研究事業について協議された。

＊　＊　＊　＊

総合健康問題総合委員会

２月10日（土）午後２時から開催された総合健康問題委員会の総合委員会では、午前中の研究企画委員会で検討された各地域におけるプロジェクト等を含め、総合健康問題研究の全体についてより具体的に検討し、来年度の研究推進の準備を行った。

公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

基金日報

１月20日　第49回生存科学研究会
１月23日　メディコ・エコノミックス研究会
２月10日　武見フェロー選考委員会

＊　＊　＊　＊

メディコ・エコノミックス研究会

１月23日（火）午後３時より、生存科学研究所会議室において平成元年度第１回メディコ・エコノミックス研究会が開催された。

昨年度行われた手弁当の研究分科会の延長線上にある研究会であるが、今年度は、基金と財団の共同事業としての生存科学研究の中で、「生存の理法」の研究という重要な分野での一研究会として位置付けられている。

第１回は、この研究会の責任者である帝京大学江見康一教授が、「生存科学研究とメディコ・エコノミックス」と題して意見を発表された。

江見教授は、メディコ・エコノミックスは人間（人類）の生存条件（資源と環境）との

関わりにおいて生命の再生産を考えることである。武見先生はメディコのなかには「生存の理法」という意味が含まれていると言われている。エコノミックスの原点はハウス・マネージメントであり、「家」は生殖・生産・生活という３つの営みをもち、生命の再生産と経済の再生産ということで、医学と経済学との出会いがある、とされた。そして、現在医療では先端技術の出現により生・死概念に影響がでてきており、ここに生命倫理の問題が起こっている。一方、自然は工業化により都市化と公害で歪められ、ここに環境倫理の問題が起こってきている。この生命倫理と環境

倫理の統合が生存科学であり、その求めるものは生存福祉であるとし、それには自立的抑制がビルトインされる必要があると結ばれた。

次回は3月20日（火）午後3時から、場所は生存科学研究所会議室、発表者は東海大学師岡孝次教授の予定。

［メディコ・エコノミックス研究会参加申込者］

井内照夫　板垣興一　岩井宏方　江見康一
遠藤　勲　大久保修吉　大瀬貴光　小川春男
奥村　集　亀田嘉苗　亀山一郎　河野裕明
小松　真　左奈田幸夫　鈴木雪夫　瀬尾　隆
関口光正　田村貞雄　中里正典　林部　弘
馬場　甫　原　次郎　日暮　真　逸見武光
向山定孝　師岡孝次　山口正民　我妻　堯

＊　＊　＊　＊

平成2年度武見フェロー日本からの推薦者決定

2月10日（土）午後1時より、研究所会議室において、平成2年度武見フェローの最終選考委員会が開催された。

今回は、前回の選考委員会で数々の有能な応募者の中から第1順位で選ばれた、東京医科歯科大学・難治疾患研究所・臨床薬理学部門助手、津谷喜一郎氏に対する面接試験が行われ、同氏が、日本からの平成2年度武見フェローとして、ハーバード大学へ推薦されることが決定された。

学術誌「生存科学」投稿規定

学術誌「生存科学」への投稿の御案内

生存科学研究所では、学術誌として「生存科学」(Journal of Seizon and Life Sciences) を半年刊で刊行することとしおります。

つきましては、生存の理法、生存科学の基本問題から、総合科学としての生存科学を構成する人文、社会、科学技術の専門領域の立場による皆様からの投稿を心から歓迎いたします。

学術誌は、生存科学研究会会員および生存科学研究所維持会員へ配布いたしますので、まだ本研究会の会員でない方は、この機会に会員としてご加入になり、研究活動にご参加されることをおすすめいたします。入会ご希望の方は、生存科学研究所へご連絡下さい。

［投稿規定］

本研究所では、誌上討論（テーマを予告）に関する論文および研究論文の投稿を歓迎します。投稿論文に対しては審査が行われ、場合によっては改稿を求められますから、御承知おき下さい。なお、プログレス・レポートに対しては、審査は行われません。

1）投稿原稿の種類

種類　内容　刷上りページ　審査

種　類	内　　容	刷上りページ	審査
原著論文	生存科学に関するオリジナルな研究開発の成果	平均6P	あり
プログレスレポート	新しい研究・開発の進展状況の報告	平均4P	なし

注　刷上りページは、題目、抄録、図表、引用／参考文献、著者紹介など、すべてを含めるものとする（刷上り1P＝400字×4P＝1600字）。

2）原稿用紙

原稿用紙には、ヨコ書き400字づめのものを使用して下さい。できるだけワードプロセッサで作成したものをお願いしますが、

その際にはＡ４版用紙を御使用下さい。

3）原稿の書き方

(1) 原稿の第１ページに表題、著者名、所属を日本語と英語で記入し、その下に余白を設けて、100－250語の英文抄録を書いて下さい。また、最後に日本語と英語で5-10のキーワードを記入して下さい。

本文が英語の場合は、ダブル・スペースで印字するものとし、表題、著者名、所属を英語と日本語で記入し、300－600字の和文抄録を書いて下さい。最後に英語と日本語で5-10のキーワードを記入して下さい。

(2) 図（または写真）は図１（Fig.1)、図２（Fig.2)、表は表１（Table1)、表２（Table2)のように指示し、その内容がわかるように簡単な説明（キャンプション）を付けて下さい。図や表は、刷上り寸法の約２倍の大きさで、黒の鉛筆またはインクを用いて下さい。

4）投稿論文の扱い

編集委員会が定める査読委員による審査に基き、編集委員が採否を決定します。査読に当っては、投稿者および査読者の両者の氏名、所属等の秘密が保たれます。査読の結果は、原則として１か月以内に報知いたします。

5）別刷り

原則として、投稿者には別刷30部をお送りします。30部以上の別刷りを必要とされる場合は予めご連絡いただければ適正な価格でさし上げます。

6）その他

原著論文、プログレス・レポート意外にも、会員だより、あるいは最近お読みになった文献の紹介・書評などの投稿を歓迎します。

7）原稿の送付先

元原稿とコピー１部と著者（共著の場合は代表著者）の連絡先（住所、電話番号）を記入したものを下記に送付して下さい。

〒104　東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303
生存科学研究所「生存科学」係
ＴＥＬ　03－563－3518

お知らせ

第50回生存科学研究会

日時：平成２年３月17日（土）
午後２時～５時

場所：大手町　経団連会館

「生存環境と生存科学」シリーズ第６回

テーマ：「人類生存環境としてのオゾン層」

講師：東大付属　地球物理研究施設
小川利紘　教授

「人類生存環境としてのオゾン層」

〔概要〕

地球大気の上層、成層圏と呼ばれる所に存在するオゾン層は、もともと地球の生命が作り出したものである。植物が光合成作用によって、二酸化炭素を酸素に変え、その結果オゾン層が形成された、と考えられている。オゾン層によって太陽紫外光が遮られるので、陸上が生命活動の場として安全となり、かくして地球の生命は一層の発展を遂げた。私達人類は、このような地球生命史の中で生まれた生物種だといえよう。

オゾン層形成の化学が解明されるにつれ、微生物も、一酸化二窒素やメタンを大気中に供給して、オゾン層をコントロールしていることがわかってきた。そして、今や人類もオゾン層に影響を及ぼす存在であることがはっきりしてきた。

さまざまな人的起源の微量気体が、オゾン層に影響を及ぼすのではないか。このような可能性が論議され始めてから20年近くの年月が経過する。これまでは、「可能性」として議論されていたが、この1～2年の間で科学者の認識は様変わりし、すでに変化は現実のものとなっている、との見方が大勢を占めるようになった。成層圏オゾンが1980年代になって全地球的規模で減り出したことを、ようやく確定できるようになったこと。南極域での顕著なオゾンの減少が出現したこと（オゾンホールの発達)。この2つの知見が契機となっている。しかも、フロンガスがその主たる原因であるとする点でも、ほとんどの科学者の意見が一致してきた。

このような科学的知見からすれば、オゾン層に変化を与えないためには、フロンガスの排出を完全にやめるほかはないという結論になる。そういうわけで、今世紀中に使用を全廃する方向で、国際的合意ができあがりつつある。

＊　＊　＊　＊

（第49回研究会の際、予定として発表しました宇沢弘教授は、教授の御都合により延期いたしました。御了承ください。）

生存科学研究所ニュース総目次

（VOL1-1～5-2）

巻頭言

1－1　茅　誠司　ニュースの発行に寄せて
1－2　熊谷　洋　「Seizon」について
1－3　藤井　隆　感情の文法
1－4　大江精三　ライフ・サイエンスと自由
1－6　井深　大　私と武見先生との出あい
2－1　渡辺　慧　生命の尊厳について
2－3　近藤次郎　ハイテク時代の倫理
2－4　山村雄一　遺伝子と人間
2－5　松前重義　武見先生の思いで
2－6　土屋健三郎　生存と生態学
3－1　筑井甚吉　レオンチェフ教授と武見博士
3－2　藤野志朗　ハーバード武見講座の萌芽
3－3　藤川正信　人間医学に対する期待
3－4　中村　元　精神と自然
3－5　大来左太郎　武見シンポジウムと発展途上国援助
3－6　不破敬一郎　武見太郎先生と公害研究所
4－1　小西新兵衛　科学と人間性
4－2　板垣與一　国際化とは
4－3　熊谷　洋　故茅誠司理事長のあとをお引き受けして
4－5　山口正民　オタワ憲章と生存科学
4－6　宮島龍興　生存と競争
5－1　大瀬貴光　武見記念賞受賞にさいして
5－1　矢口光子　武見記念賞受賞にさいして：もう一つの道
5－2　渡辺　格　「物質文明」から「生命文明」へ

研究発表

1－1　青木　清　「科学および科学技術と人間」会議の開催について
1－2　第1回「科学（および科学技術）と人間」の会議・概要
1－2　医薬品産業問題研究委員会
1－3　第2回「科学と人間」の会議
1－3　健康政策研究委員会
1－3　藤川正信　武見太郎先生文献目録の作成計画

1－4		第3回「科学と人間」の会議
1－5		第4回「科学と人間」の会議
1－5		昭和60年度医薬品産業問題研究委員会報告
1－6		第5回「科学と人間」の会議
2－1		第6回「科学と人間」の会議
2－1		生存科学研究所メディコ・エコノミックス研究委員会
2－1		地域医療のあり方研究委員会
2－2		第7回「科学と人間」の会議
2－2	筑井甚吉	医療体制と費用負担のあり方
2－2	江見康一	メディコ・エコノミックスへの道
2－2		医療品産業の長期展望に関する研究分科会
2－2		「ライフサイエンスを中心とした科学技術と人間および社会との調和を図る上での問題点に関する調査研究」
2－3		第8回「科学と人間」の会議
2－3	安川正彬	我が国の将来人口推計、昭和61年安川推計
2－3	梅園　忠	医師会病院の概要
2－4		第9回「科学と人間」の会議
2－4	田村貞雄	現代経済学と経済政策の国際化
2－4	藤野志朗	包括医療における医薬品の役割
2－6		第10回「科学と人間」の会議
2－6	青木　清	「ライフサイエンスを中心とした・・・調査研究」
2－6	小川春男	日本経済と援助
2－6	中村　賢	神奈川県における医療計画策定過程
2－6	瀬尾　隆	日経産業シリーズ「医薬品」について
2－6	師岡孝次	医薬品とIndustrial Engineering
3－1	北林春美	インターナショナル・ヘルスと日本の協力
3－1	松田　朗	アクティブ80ヘルスプラン
3－1	高橋由美子	東洋医学からホーリスティック・ヘルスへ
3－2	田中　滋	医療経済原則の変革と提言
3－2	辛島恵美子	科学技術政策からみた技術と安全
3－3	我妻　堯	国立病院医療センター国際医療協力部の活動について

講演会・シンポジウム

1－3		ニューロサイエンスの新しい展開（大阪講演会）
1－2		ハーバード大学武見講座特別記念講演会
1－4		ハーバード大学武見講座第2回国際シンポジウム報告
1－5		FDA高官来日特別記念講演会
2－5		医薬品に関するシンポジウムとワークショップ「医薬品の開発と行政及び倫理」
2－5		高齢化社会の地域医療（岡山講演会）
3－5		ハーバード大学武見講座第3回国際シンポジウム
3－6		明日を切り拓く地域医療（広島講演会）
4－4		社会発展と医療（千葉講演会）
4－6		市原市「市民の健康づくり計画」シンポジウム

ハーバード大学武見講座

1－1		武見プログラムの紹介
1－1		武見プログラムの研究論文目録
1－3		第2回武見国際シンポジウム・プログラム
1－4	田中慶司	ハーバード大学武見講座留学記（第1回フェロー）
1－5	開原成允	ハーバード大学武見講座の意義
1－6	藤井　充	国際的・学際的研究の場としての武見講座（第2回フェロー）
3－1	丸井英二	国際的視野での保健医療のために－武見プログラムの1年（第3回フェロー）
3－1		ハーバード大学武見講座活動報告
3－2		ハーバード大学武見講座活動報告
3－3		ハーバード大学武見講座活動報告
3－4		ハーバード大学武見講座活動報告

3－4		ハーバード大学武見講座出版物の御案内
3－5	大前和幸	武見記念国際保健講座を終えて（第4回フェロー）
3－5		ハーバード公衆衛生大学院武見講座だより
4－1		ハーバード大学武見講座活動報告
4－2		ハーバード大学武見講座活動報告
4－3		ハーバード大学武見講座活動報告
4－4		ハーバード大学武見講座活動報告
5－1		ハーバード大学武見講座活動報告
5－2		ハーバード大学武見講座活動報告

生存科学研究会

1－1		生存科学研究会の紹介
1－2	板垣與一	生存科学の課題と方向
1－4	館・船久保	次世代ロボットと長寿社会の支援技術
1－5	大島・梅沢	心の健康
1－6	大内幸夫	エネルギー問題
2－1	筑井甚吉	ハイテクノロジー社会とメディコ・エコノミックス
2－2	小川春夫	技術と国際経済
2－3	板垣與一	生存科学の認識枠組への一試論
2－3	渡辺　慧	生命の尊厳
2－4	大江精三	国際競争と生存科学
2－5	渕　一博	第5世代のコンピュータと未来社会
2－6	北原　隆	人類の生存に役立つような国際競争がありうるか—人類行動学の知見から
3－1	植之原道之	バイオエレクトロニックスへの挑戦
3－2	筑井甚吉	技術社会と貧乏物語
3－3	大江精三	国際競争と生存科学
3－4	大久保利晃	兵庫県の生存科学研究組織設立に関する調査研究
3－4	伊藤幸郎	生存の質を考える研究会の報告
3－5	青木　清	「科学と人間」の会議：科学技術と人間の問題
3－5	中村正久	開発途上国の環境問題を通して考える生存と生活
3－6	藤川正信	武見太郎の「生存の理法」の文献学的考察
3－6	高田　勗	地域医療のあり方研究分科会報告
4－1	渡辺　慧	生存について
4－2	丸井英二	戦後日本の公衆衛生改革の一側面：人口動態統計制度改革とGHQの果たした役割
4－2	大前和幸	職業性健康影響発生に及ぼす直接的・間接的暴露量変動要因の解析
4－3	渡辺　慧	再び生存について
4－3	井深　大	生存について
4－4	W.レオンチィエフ	健康の体系的研究と環境保護
4－5	不破敬一郎	地球環境と生存科学
4－6	向山定孝	地球環境と生存科学
4－6	上原鳴夫	開発途上国における病院プロジェクトの課題：ボリビアの事例研究から
5－1	大瀬貴光	発展途上国における産業化と環境問題
5－1	大林雅之	米国のバイオエシックス研究動向と生存科学：ケネディー研究所に学んで
5－2	江原昭善	人間はなぜ人間か－人類誕生の地平より

エッセイズ・キュート

1－1	大内幸夫	創造力
1－2	大内幸夫	コンピュータへの過信
1－3	大内幸夫	バイオテクノロジーの将来性
1－4	大内幸夫	チェルノブイリ原発事故と健康物理
1－5	大内幸夫	治安と麻薬
1－6	大内幸夫	日米のハイテク競争
2－1	大内幸夫	新しい技術教育
2－2	大内幸夫	日本の大学の研究体制
2－3	大内幸夫	エイズ退治
2－4	大内幸夫	研究者のやる気
2－6	大内幸夫	超電導への期待
3－1	大内幸夫	Be patientな英語教育

3－2　大内幸夫　情報処理の難しさ
3－3　大内幸夫　美的感覚三等国
3－4　大内幸夫　真の国際金融都市の条件
3－6　大内幸夫　大気汚染と異常気象
4－1　大内幸夫　「貧乏」からは脱した？
4－2　大内幸夫　公共事業大国
4－3　大内幸夫　気にかかる日米関係
4－4　大内幸夫　近代化の遅れ
4－5　大内幸夫　「政治三等国」返上のチャンス
4－6　大内幸夫　熱帯雨林の保護
5－1　大内幸夫　運命と決断
5－2　大内幸夫　生活水準と経済の効率

生存科学ビューポイント

1－4　安川正彬　生存科学と人口の推移
1－5　安川正彬　生存科学と世界人口
1－6　小泉　明　バイオインシュアランス
2－1　小泉　明　「医療資源」
2－2　土屋健三郎　生存の理法
2－3　土屋健三郎　プロフェッショナル・フリーダム
2－4　高田　勗　ヘルス・サイエンスとヘルス・サイエンティスト
2－6　田村貞雄　ポジティズ・チョイス
3－1　田村貞雄　健康福祉
3－2　亀井康一郎　Humanismと生存科学
3－3　中山昌作　地域医療
3－4　亀井康一郎　寸鉄医言と生存科学
3－5　三枝靖夫　「生命体」の英訳
3－6　三枝靖夫　生存について
4－1　関口光正　医療のRationingについて
4－2　関口光正　米国の双子の赤字とManaged Care
4－3　高田　勗　WHOのオタワ憲章にみられる生態学的健康概念
4－4　中村　賢　人類生存の単位としての「家庭」
4－5　佐藤貴一郎　環境と生存科学：細胞膜現象
4－6　梅園　忠　エントロピーの法則
5－1　佐藤貴一郎　生存保障と情報化
5－2　西岡久壽彌　我が国の肝炎対策に武見太郎先生の果たされた役割と遺訓

維持会員だより

1－1　桜井末男　バイオエシックス研究への期待
1－2　馬場　甫　恩師武見会長を偲ぶ
1－3　国井長次郎　紆余曲折
1－4　吉川　暉　地域医師会の社会的存在意義
1－5　維持会員名簿
1－6　同上改訂版
1－6　田島達郎　生存秩序と予防医学活動
2－1　大久保修吉　所感
2－2　原　次郎　所感
2－3　中里正典　昭和61年度生存科学研究会総会に出席して
2－4　相沢好治　医の本領は人間理解に
2－5　山本幹夫　シンポ「医薬品の開発と行政及び倫理」を聴いて
2－6　土屋健三郎　一医学生による論文投稿に寄せて
3－1　小松清彦　武見先生の書
3－2　鵜浦喜八　生存秩序と遠野宣言
3－3　大塚恭男　武見先生と東洋医学
3－4　草野洋一　生存科学研究所への思い込み、私の考える生存研の原点
3－6　杉本純雄　「明日を切り拓く地域医療」の主題のもとに
4－1　小玉香津子　看護と武見文献
4－2　藤川正信　武見文献と生存の理法
4－3　長畑正道　最近の親子のあり方
4－5　卜部文麿　全ての悲嘆は怒りになる
4－6　三枝靖夫　決定的瞬間
5－2

その他

1－6　維持会員名簿（維持会員だより）
2－5　生存科学研究会内規
2－5　生存科学研究会会員名簿
3－1　第1回武見記念賞授賞式
3－2　研究所ニュースに関するアンケート集計結果
3－6　茂田井教享　武見先生の思いで
3－6　成田　至　武見先生と読書
3－6　関　成道　武見太郎先生と丸善
3－6　森末新一　ある発見から抗潰瘍剤・ミドリアミンが生まれるまで
4－1　熊谷　洋　茅誠司理事長に捧げる弔辞

4－4　㈶生存科学研究所及び基金研究責任者一覧表
4－5　雑誌『生存科学』への投稿の御案内（投稿規定）
5－1　第2回武見記念賞授賞式
5－2　雑誌『生存科学』投稿規定
5－2　生存科学研究所ニュース総目次

理事会・運営委員会等

1－1　財団・基金合同顧問会(ニュース)
1－3　昭和60年度第4回理事会(ニュース)
1－4　昭和61年度第1回理事会
1－4　基金第7回運営委員会(ニュース)
2－3　昭和61年度第2回理事会
2－4　昭和62年度第1回・第2回理事会
2－4　基金第8回運営委員会(ニュース)
3－3　昭和62年度第3回理事会・評議員会
3－3　第10回基金運営委員会
3－4　昭和63年度第1回理事会・評議員会
4－2　昭和63年度第2回理事会
4－3　昭和63年度第3回理事会・第2回評議員会
4－4　平成元年度第1回理事会・評議員会、第2回理事会
4－4　平成元年度第1回基金運営委員会
4－4　生存科学研究所役員・顧問・評議員名簿
4－4　基金運営委員・顧問名簿

ニュース・オブ・ニュース

1－1　以降毎号

公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

1－5　以降毎号

編集後記

年度末を迎え、研究所は新しい研究の準備や事業計画作りで忙しくなりました。

そして愈々待望の研究雑誌『生存科学』が発行になります。それにともない、このニュースも新しい編集方針で再出発することになりましょう。論文や研究会の詳しい報告等は雑誌に任せ、ニュースは予報と速報に専念することになるでしょう。

これまでの長い間の御愛読、ご投稿、暖かいアドバイス等々本当に有り難うございました。編集委員一同厚くおん礼申し上げます。

ここで、これまでニュース編集にご協力頂いた先生方を紹介させていただきます。始めから一貫して「エッセイズ・キュート」をご執筆くださったのは大内幸夫先生です。そのエッセイズ・キュートの名付け親、三枝靖夫先生、読者のアンケート調査・解析等にご協力くださったのは中村　賢先生、佐藤貴一郎先生、遠方に居られながら維持会員だより集めに尽力された田島達郎先生、生存科学ビューポイントの先鞭を付けてくださった安川正彬先生、ハーバード大学武見講座関係の報道にご努力くださった開原成允先生、そのほか多くの先生方、事務局の方々に大変なご協力を頂きました。改めて感謝申し上げます。

これから形が変わりましても、引き続きニュースのご愛読、ご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。　(N)